

## 天空の声を 今こそ

十七回生 山本 恵子

(吉田)

戦後70年を前に出版された、「木村久夫大先輩」の遺言「真実のわだつみ」は、涙なくしては読み進むのは辛いことでした。

上官の罪を背負い偽証を強いられ、生命を削りつつ、思いの丈を残し処刑された理不尽さには、心中の葛藤いかにかりだったことか。

さて、1941年パールハーバー襲撃が始まり、それは千里第二小学校二年生の12月8日のことで、父より「パパ・ママ」と呼んではいけないと言われたことでした。「出征兵士が無事に戦場から帰国なさるのを祈りましょう」と母と千人針を縫ったこと。

庭には防空壕を掘り、防空頭巾での登下校時、機銃掃射を受け、植え込み塀の下にもぐり難を逃れたこと。路傍の草も食材になり、大豆やさつま芋の間から少しの白いご飯のある主食、キャベツ一つ、大根一本を隣組十軒単位で分けあって、飢えを凌いできたこと。

一方、南洋諸島その他では激戦でした。

国民には敗戦色強まりつつあっても報道官制厳しく、戦況は真実を知らされませんでした。その後、大

阪市内にB29から焼夷弾が雨の如く投下され始めてからは、日本は負けると思いました。

そして米軍機からは、「早く日本は降伏しなさい」のビラが何度も撒かれました。

家族で福岡へ転居した昭和20年8月に広島、長崎に原爆投下され世界初の悲惨な犠牲者を出し、続いて各地の都市が空爆による焼野原と犠牲者に、「本土決戦」を豪語してきた軍部、その政権に悲しみ苦しみと共に怒りがこみ上げたものです。

特攻隊や人間魚雷で死の片道切符を手に命令に服従せざるを得なかった若者達は、皆木村先輩と同じ思いだったことでしょう。

その後には生を得た人達に、日本が隣国や南洋諸島、その他の国々に何をして来たのか、素直に歴史として教育されていないことが、今私達は危機にあることを冷静且つ真剣に考え行動する時ではないでしょうか。

武器対武器は紛争を拡大し、難民は増え続け、テロの続発、脅威は武器で解決しなかった今迄の事例で判明していることです。

日本を支える若い人達、子供達、自衛隊の人達も、他国の人々を殺したり殺されたりがあつてはならないと切に願います。

原爆も原発も、放射能、核につながる化学物質であ

り、人間の如何なる技能、知識で制御し、速やかに安全になるとは言えないのではないのでしょうか。4年前の3・11での原発関連の被害者の苦しみは、風評被害を含め未だに癒えることがないのです。

福島に原発が造られる数年前迄、かつて4年間福島に勤務していた私も、原発への道が水面下で進んでいたことは多くの職員も知りませんでした。

他県でも「安全神話」のもと、同じ状況で原発が造られてきたと思います。

木村先輩の「自分の死が、未来の踏み石となることにより、**自由な社会**において、**自由な進歩**を遂げられんことを地下より祈る」と、心の動揺を封印し、刑の執行に臨まれた遺志、及び内外の3千万人とも言われる戦争犠牲者の方々の魂に対し、私達は反省し、教訓として生かして来たと言えるのでしょうか。

今年死去されたドイツのリヒャルト・フォン・ワイツゼッカー元大統領は、1985年に連邦議会での演説で「過去に目を閉ざす者は、現在にも盲目になる」、「我々が全て過去を引き受けなければならぬ」と延べ、ドイツの戦争責任者やホロコーストと、正面から向き合うことを、国民に求めて、世界中に感銘を与えたこの言葉は、世界から信頼を得たのに引きかえ日本は如何でしょう。

我が国では、戦争体験者が十分に次世代に伝えてこなかった責任を反省し、今からでも継承すべきこととして、語り部として伝えていく義務があります。

一方、天皇ご夫妻は、沖繩を初め、南洋諸島、日本の多くの人々に知らされてこなかった激戦地での犠牲者の眠る地への慰霊の旅を続け、3・11のみならず、自然災害の被災者の心に寄り添ってこられました。折に触れ、

「私達は歴史を忘れず、平和な未来を歩めるように」との主旨を静かな口調の中にも、強い意志を込めて表明なさっています。

1975年夏沖繩を訪問された時の思いを、長い時間をかけて沖繩の古い形式を学ばれ、詠まれた「琉歌」をここに引用させていただきます。

「花ゆうしやぎゆん」(花を捧げます)

「人知らぬ魂」(人知れず亡くなっていった多くの人の魂に)

「戦ねいらぬ世ゆ」(戦争のない世を)

「肝に願いて」(心から願って)

まさに木村先輩が命をかけて願った遺志に沿うも

のと思います。

そして若い人達にこそ恒久の平和を念願し、維持し、生存する権利のあることを自覚し、希望を抱きつつ、世界の人々と平和外交を念頭に、日本の未来を歩まれるよう心より祈願したいと胸に一層刻みました。

おわり